

奈良と堺

——莊園領主都市と港灣都市との關係——

永島 福太郎

〔要約〕本稿は、莊園領主及びその居住都市と港灣都市との關係推移、特に此等都市がその相互關係と町人勢力の増大と相俟つて、近世的封建都市へ転化する過程を、奈良と堺に例をとつて実証的に究明せんとしたものである。住吉社の莊園であつた堺浦は、仁治頃より莊園領主春日社眞福寺の勢力を背景に漁港に發展した。此の場合、堺は莊園領主の居住都市の從屬都市に過ぎなかつたが、南北朝動亂期に武家方の兵站地として港町に發展したのを第一段階、応仁大亂を第二段階の契機として飛躍的に發展する、即ち港町として堺が發達する時、莊園的封鎖性に対して開放性もたらされると共に消費都市化し、更に領主権圧力の稀薄さに対する町人勢力の増大によつて都市自治の發展等、そこに堺の近世的封建都市化の道が開かれた。ここに奈良と堺との關係は、經濟的には堺が奈良を從屬都市化し、その町人勢力は兩都市の文化交流を促進すると共に、奈良をも近世的封建都市へ指向せしめることになつた。

一

莊園制下に於いて港町は、莊園領主の居住地を指向しつつ數的にも質的にも發展する。港灣地が單一の莊園という關係に立つものもあるが、その港灣が特に重要なものであれば、莊園的封鎖性は次第に減少して行く。港灣地が發達

して港町としての存在が指摘される頃となれば、それは著しく開放的になつて来る。①港町の開放性はそれが發展の爲には必然的に將來されるものである。しかも港町はそれ自体消費都市化する。特に輸入を主とする港町に於いて著しい。中世に於いてこの輸入港町は、畿内に限定して言えば、京都奈良の二大莊園領主都市の門戸たる兵庫・淀・木津・

坂本・大津及び堺である。地方の港町はこれらのいはば従属的なものというてよい。これらのうちで、外国貿易という側面的援助もあつて、兵庫及び堺が異常な發展を為す。なほ年貢物の金納化より進んで、荘園制の動搖によつて生じた商品化もこれを助長する。しかも年貢物輸送も全くその跡を絶つたものではなく、また現物輸送も他の目的も生じて依然行われる。例えば延徳二年に大内新介は中国より三千人の手兵を率いて上洛するが、その為に国許より米一万八千石を輸送した如くである^⑤。

京都及び奈良に於ける荘園領主は、説く迄もなくその数が多い。朝廷といひ將軍といひ、これ亦一個の荘園領主である。これらの荘園領主は、要衝に位置する港町については関心を注ぐことになる。その最上の意欲は、その領有であろうが、開發領主であつてさえも、これを保持するには困難を生ずる。荘園領主はそれぞれのその年貢物輸送には、その被官を港灣に派遣し、また直屬の梶取等を擁していた訳だが、次第に港町の間と結び、これに輸送を一任することになる。間は早く商業機能を具えたものであるし、

単一の領主とは限らず、その実力によつては數個の領主と契約を為すに至るのが常である。始めは身分關係をも伴つていたものが、単に契約の形に發展するのである。始め荘園領主の港町領有の意欲は、その港灣地帯への進出を計り、領下港町の建設となつて現れた。兵庫に於ける如く、これを擁する福原荘は、早く天平年間には東大寺領であり、次いで平家所領として著れ、これが源頼朝の妹たる藤原能保室家領となり、転じて九条兼実領となつている。しかし福原荘は輪田荘や兵庫三箇荘を内包しており、それぞれに本家領家の存在が指摘出来る。室町時代となれば、將軍家は兵庫下荘を直轄領としており、また外国貿易の關係もあつて將軍家御藏を擁して居る程であつて、兵庫は事實上、將軍直領の觀があつた。鎌倉時代に於いても、これが無意味に將軍家より手離されていたとは考えられない。即ち兵庫は、多形的には幕府勢力の下に寺社本所の勢力が伸びて居るが、次第にそれは得分關係のものとなり、内容的には始め寺社本所に育成せられた港町が、次第に自立的傾向を示していたといえる。鎌倉末期から東大寺興福寺が兵庫島

の南北兩関を扼するが、これは関稅収益を主目的としたには相違ないとしても、この港町進出の意欲があつたと考えられてよからう。^⑤ 堺は始め京都からは見棄てられていた。それが漸く彼の視野に入つた頃は、莊園的港町の域を脱していた。これも將軍家直領の形態をとる。將軍家直領ということは足利幕府などでは、實はそのことが領主権の脆弱を意味している。たとい相國寺崇壽院領というたところで、既に兵庫の項で説いた如き關係である。ここに都市發展の進路が開かれていたわけであり、都市自治が急速に發達するのである。

兵庫が応仁大亂時の争鬪場たるを免れたならば、或は堺にその地歩を譲らなくとも済んだかも知れない。兵庫・堺の勢力消長に關する詮議立は一切止めることにするが、この時に堺が比較的平和であり、背後に戰時疎開地たる奈良を有し、また自らも疎開地となつたことはこれに一步先んずるを得た要因となつたものであらう。堺は既にこの頃には奈良の屬位を棄て、これと對等の關係にあり、むしろ徐々に奈良をその從屬都市化せしめんとする氣配が生じてい

た。

港町は領主権圧力の稀薄さに乘じて都市自治を進める。都市自治は港町、これに次いで古い歴史的宗教都市に於いて發達する。特に港町はその町人勢力を以て莊園領主都市への反擊に出づることとなり、それが自己及び關係都市の近世的封建都市化を促すに至つてゐる。莊園領主都市と港灣都市との転位が見られる。以上の觀點に立ち、ここに奈良と堺との關係を説述して見ようと思ふ。

① 港町の發生については、史學雜誌四四号西阿虎之助氏「莊園制に於ける倉庫の經營と港灣の發達と關係」及び故徳田劍一氏著「中世に於ける水運の發達」參看。

② 藤涼軒日録延徳三 十二 廿五、四 七 十三

③ 春日社で神人を下向せしめた例は備後尾道浦に永仁三年五月、兵庫島に同四年七月（祐春記）があり、罷取は東大寺領周防確井封の例がある。（東大寺文書廳底四五）

④ 神戸市史

⑤ 河上五関の如きも一連の關係にあり、永仁頃に興福寺が淀関を獲得するのも、淀の地及び港灣機構への意欲と考えたい。

⑥ 堺市史や神戸市史に説き尽されている。

二

堺が荘園として成立するのは、堺市史の考証する如く、鎌倉時代の建長頃であろう。堺は南北両荘に分れるから、それぞれについて考究する必要があるが、ここでは厳密な区別の要もないので暫く併合して記述を進めて見よう。堺はその地理的關係から、早く住吉社との關係を有している。堺市史は、後醍醐天皇の延元々年四月に社領として再確認されたことが知られるが、伝説的にはなほ古くに遡るといふて存疑している。ここにその伝説を私の寓目した史料から検討して見よう。その一つとして住吉大神宮年中行事を見ることにする。それは拾芥抄にも所載する九月同社相撲会の説明である。

此会天下安全之御願、当社嚴重之大会也、致種々之礼奠、表三韓退治之義、不可不嚴重行之神事也、昔此日於堺浦、以三韓所貢珍財、交易成市、名浜市、本朝市之始也、是置浜浦使、開口下司、小塩穴刀称浦網使、浜御油座使、治堺浦、取賦稅勤仕神用、延元年中熊代彈正於堺、致狼

籍、仍被加制止、嚴密可致其沙汰之由被仰下、又正平十五年十月九日堺庄如元被返付当社、然凶盜蜂起、掠略神領、相撲会衰微、職此之由也、今神輿出御、宿院設傳供、師子雖渡無舞樂、勅使間纔存礎石、相撲競馬寥々無聞、宿院辺婦女女禿小升為小兒玩、空傳宝市之名、懷古者感情無窮、

これは恐らく住吉社と堺との關係が稀薄となつた宝町初期のものであろう。延元年中の熊取彈正の狼籍ということ、既述の後醍醐天皇の安堵と連関されるが、この熊取彈正の乱妨は、正平十三年八月に守護楠木正儀に命じてこれを停止せしめんとした村上天皇の綸旨と正しく合致するものであつて、この時にそれが成功したものと解せられる。十五年とあるのは十三年の誤りとしてもよいし、それまでかかつて再びかかることのなき旨の安堵がなされたと見てよい。この点では概ね信をおける本書の記載に於いて、相撲会に當つての市の興行が興味を引く。堺浦には住吉社の供菜人が早くから見られたのであろう。浜御油座使というのも、南北朝頃には同地に進出する大山崎油座神人との抗

争があるから、これもその頃以前にその存在が指摘出来てうである。^④また宿院は住吉社の宿院で既に平安朝に開口原の地にあつたといわれ、住吉神主の小堂が永保元年の爲房郷記に見えている。^⑤これらによれば本朝市の始めというような平安朝までは遡れないであろうが、此の辺が住吉社の勢力圏となつていたのは、時代もかなり遡るのであろうと思われ、かの伝説も強ち否定されぬほどのものである。開口神社の末社化も鎌倉時代に見られたであろう。しかし上代からその当時にかけては、堺の地は問題になるほどでなく、堺浦が注目されていたもので、堺の地が問題となるのは、鎌倉末からと見てよからう。

堺の近辺は住吉社の勢力圏というたが、明証は欠くけれども、和泉国は平安中期頃から撰閥家領となつていたのではあるまいか。近衛家領目録によると、和泉国はその大番勤仕の国となつてゐる。この關係によるものか、春日社興福寺領の荘園が、撰閥家領の所職を得てかなり数多く見える。また堺浦近辺の漁民は春日社の供業の爲の魚貝の採集に當つてゐる。嘉禎二年十月に春日社祠官等は、「道に

守護武士通わざるの間、和泉国の日次の供業魚貝等、去月下旬より当日に至るまで進上せざるに依つて、彼供業物は悉く皆闕如せしめんぬ」と訴えているが、これは後に建武四年六月、足利尊氏が吉野通達の疑ありとして禁止せられた春日社供業備進の市座神人に堺浦魚貝売買を許したところのあるのと考へ合せて見るによつて、それが堺浦のものであつたことが知られよう。この供業神人は春日社では他の座業神人が散在神人として白人神人と称されるのに闕らずに賣衣神人とされ、本社神人と同様の待遇を与えられている。^⑦春日社に見れば、海面の最短のものは当地であるから、特に重要視して恐らく平安朝から漁民を神人の身分としていたものと考へられる。また応長元年に興福寺一乘院貝新座寄人四郎男が和泉国の住人千手王次郎から二百六十貫文を借り、鉞を購入して信濃地方へ売捌に出かけているが、この貝新座寄人はこの堺浦の供業神人か或はこれを扱つた商人であろう。^⑧これを助長したのもとして、嘉禎二年の春日社造替には造国司として和泉守藤原顯方の任ぜられたことがあげられ、仁治二年に顯方が造国司とし

て阿波守となるまで和泉国は春日社の造園となつてゐる。^⑨
これらによつて見ると、堺浦近辺に於いて、住吉社に並んで春日社勢力が延び、或は住吉社を圧倒してゐたものと考えられる。それかあらぬか世良親王家御遺跡臨川寺領筆目録によると、堺南庄の前身たる塩穴庄は本家が春日社であつたと見えて居り、^⑩堺の地に春日社はその手足を既に伸している。これは南北朝の初にかかるものであるが、春日社が塩穴庄を領したのは、更に遡るものではあるまいか。推測すれば住吉社は北方、春日社は南方の地に進出したのであるうか。堺浦及び堺の發展の初期には、私は春日社興福寺の荘園領主としての存在があつたといいたい。

しかしここまでの堺は漁港的存在であり、いわゆる港町ではない。奈良の領主側でも西国物資はなほ兵庫に頼り、兵庫への進出に腐心してゐた頃である。しかしまたま南北朝の争亂が勃發し、吉野朝廷が見られることになつて、漁港堺に軍港たる価値が生じて来た。宮方では熊野四国の救援を此の港に於いて求めたし、武家方はこれを阻止する為にも此の港を扼する必要があり、ここに於いて堺が兵站

地となり、延いて港町として急速に發展した。商船の来港も次第に多くなつたと見え、これに着目したのが東大寺であり、堺浦泊船目録を造東大寺八幡宮料として獲得するに至つた。応安六年五月のことで、それは南荘に於いて向う三箇年を限つてゐる。東大寺は北朝からこれを得たのであつて、既に堺は北朝方となり、南朝方に組した住吉社津守氏勢力は一掃され、たとい住吉社に北朝系のものがあつたにせよその勢力は衰退したと見るべきであらう。東大寺は三年後の永和二年六月に至つて再び目録の三年延長に成功している。この時は北荘のそれにかえられた。しかし東大寺のは浦泊目録であつて、堺は幕府の扼するところとなり、その港灣が整備された。それに伴い港町も發達し、町人にして論語覆刻を為す者さえ現れたほどで、ここに幕府領として確立されてしまふのである。その庄卷は堺を扼して大内義弘が応永六年にこゝで叛したことである。南北兩荘の区分はあつて、各個それぞれの領有關係の相違はあつたけれども、幕府領としての本質は後代にまで等しく及ぶのである。その下にあつて、堺町人の發展があつた訳であるが、

それはここでは省略する。ここでは堺には春日社興福寺の領主としての勢力が伸びており、関稅收納とはいえそれは土地への連関性もある東大寺勢力の加つていたことを示さんとしたものである。

- ① 東山御文庫記録
- ② ③④堺市史
- ⑤ 春日社家牘茂記。この前後事情については拙著「春日社家日記」參看。
- ⑥ 春日神社文書第參。市歴の座は虫食で庄ともよめる。同文庫刊本では庄としておいたが、座の方が良いのではないかと思ふ。
- ⑦ 祐春記嘉元六年六月。
- ⑧ 筒井氏本東大寺文書。
- ⑨ 祐茂記。
- ⑩ 天龍寺文書。
- ⑪ 堺市史。

三

堺の都市は既掲の住吉社年中行事によつて推測すれば、農漁村の市から發達したのかも知れない。南都領主の保護

を受けて徐々に發達したのが、南北朝の動亂を契機として飛躍的に發達した。そして南都との領有關係は絶たれたが、依然その地理的關係から両者の關係は絶たれない。しかしそれが相對關係に変化することは見逃せない。堺が港町として發達し來つたことによつて、従來は兵庫に頼つていた西國領地からの年貢物輸送の一部を堺に頼ることになつた。康暦二年の東大寺領周防仁井令地頭職請文案には、年貢二十貫文を爲替に組み、兵庫或は堺に於いてこれを現金に換え、東大寺に納入すべきを約したことが見え、その趨勢を見ることが出来るし、兵庫よりは堺の方が奈良としては便利であつたろう。^①時代が下れば、奈良と堺との間に於いて、問屋取引關係が生ずるが、それも或いはかなり早い時期にも見られるかも知れない。魚貝の類も、淀或は木津に一部はよるのであるが、その大部分は堺に頼つたものである。また既述の如く、京都と堺との關係が密接となるので、京都・奈良・堺が三角形の頂点的存在となり、社會經濟をはじめ、文化の交流が生じて来る。特に応仁以後となると、群雄の畿内覇權の争奪戦がこの三都市を挟んで行わ

れるようになる。例えば戦國武將の掉尾ともいうべき松永久秀は、堺に入り奈良に転じ、兩者を足場として京都に出ているのである。しかしこの三都のうちでは、外国貿易場という利点も加わり、堺が活気を呈する。堺に集められた上級商品が京都・奈良へと流入し、その上流社会の消費生活を満すに至るのである。唐物は勿論であるが、日常品では医薬品衣類などが最たるものである。また堺が応仁の亂後急速に發展したのは、奈良と同じく堺が京都町人等の疎開地となつたからである。疎開地として奈良と堺との相違は、奈良へは撰閥等の貴族が含まれていたことである。堺へは、庶民それは町人が多かつた。奈良で法華宗徒が多くなつたのは、京都の町人が入り込んだからだという^②。堺にも法華宗の僧侶及び町人が多く入り込み、これらは浜近くの在家にあつたもので、その中に大舎人織手師があつたようである^③。この織手師が堺に土着してしまつた關係からか、文明七年に維摩会講師となつた大乘院政登の装束を、その師父たる尋尊は又四郎男を使として堺に需めている^④。この又四郎は始め十市氏の下人として売られ、転じて堺。

良の大乗院門跡に転じ、その子の愛満丸は尋尊の小姓となり、その兄の又六は堺に居を占めていた。従つて又四郎は奈良と堺とをしばしば往復しているから、これが門跡の堺への買物使いとなつたのは度々であつたらう^⑤。また門跡には恐らく愛満丸の後任と思われる愛千代丸という小姓がいたが、この父母は堺に住していた^⑥。かように堺と關係深い者が門跡内に雇われていたということは、奈良と堺との交流が深くなつたことを示すとともに、門跡などの生活に堺に仰ぐものが物心両面に亘つて多くなつたことを意味するものであらう。文明十五年に大乘院門跡ではその釜居殿の作事に當つて、用材は全て堺の材木屋道久方より購入した。その買物には門跡の被官で堺と往來を事としている泰九郎が使走りをしている。一万三千支の用材を運送したもので^⑦ここに門跡の如き莊園領主が材木を商品として購入したことは頗る注目すべき転機であり、この後も例えば文明十九年の春日社造替には堺への用材代未払金五百貫文という如く、堺商品の材木が奈良に入つて來ているのは、所領袖の離説と共に、堺に於いて材木が豊富で、しかも廉価であつ

たことを示すものであろう。これらは一二の例に過ぎないが、貨幣経済の發展と共に、奈良では堺に於いて物資を調達することが多くなつたことが知られるであらう。奈良の商人にしても、商品が堺に得てこれを販売するに至るは当然であらう。文明三年八月のことであるが、大乘院寺社雜事記に「近日和泉の堺と此方公事之あり、当取沙汰云々」とあるのはその詳細は分らぬが、商取引關係の粉擾であつて、兩者の經濟關係の深さを示すものである。加えて座の解体期に入つて居るから、恐らくこの趨勢を助長したのもてもあろうが、堺商品が奈良市民の上下に歡迎せられたものと考えられる。逆に奈良から堺へは、團扇・人形・刀劍・時絵などが送られ、そのうちの一部は外國貿易品ともなつたことであらう。堺の極盛期たる戰國末あたりになると、奈良は經濟的には堺の從屬都市の如きに至つた。奈良にも富有町人が成立するが、これらは堺との連関に於いて増大したものと見られる。茶会記などからその往來を探つて見ると、表面的には茶の交歓と見られるが、それは商取引の具に供せられたものではあるまいか。天正年間に奈良の佗數

寄著として、北野茶会にも出仕した子守道六というものがあり、堺から利休・津田宗及・今井宗久などが奈良へ来た時の宿となるのであるが、これは奈良の坂東屋という豪商の使丁であつたといわれているのは、恐らく堺との商用に便があつた為のものであつたらうし、松屋三名物を有名な奈良の松屋源三郎は漆師屋であつて見れば、その堺訪問は塗物商品の所用をからんでいたと考えてよからう。

堺へは大和の武將の亡命するものもあつたし、甚だしきは田券を堺において秘藏してもらつた例すらある。文化人の場合は章を別にして述べるが、奈良から堺に出て商業を営むものや、堺から奈良に移往して營業するものなどは枚挙に遑がない。本店支店或は同族店の關係にあつたものもあろう。⑩また天文廿二年正月の十三日から十四日に亘つてその三分の二を焼いたという堺の大火の際には、堺市民の乞食の躰ともいえる姿で奈良に遁れ来たものは、數知れぬといふことであつたし、また大和の今井宗久が堺に於ける豪商兼茶人になつたこともその一例である。奈良の藥屋宗芳というものなど堺から奈良に來り、堺を本拠に仰いで

營業したものと考えてよからう。しかしここで考えねばならぬことは、堺商品が奈良で販売される場合、その売価がかなり上るので、便のあるものは堺に直接購買に赴いたことである。天正八年正月のことであるが、興福寺多聞院英俊は、与一を使として堺で蜜三斤五十目を鏝銀一貫四百文で買入れた。それは奈良で買うより非常に安く「余ノ菓種モ奈良トハ一倍ニアマリテ安キ也」というている。^⑩これは奈良の商業が現在に及んで發展せぬ由として見る事が出来よう。これも奈良を堺の従屬都市と見る一理由である。最後に天正二十年に起つた奈良・京都・大坂・堺の金商人即ち金借に対する豊臣秀吉の彈圧事件が生じていることを指摘して置くが、それは奈良においても最も酷しく、それが堺商人の告発によるものであつたことは、奈良の金融業者が堺などに於いて經濟攪亂行爲を行つた為であらうし、堺と奈良との經濟關係が密接であつたことを示すものであらう。

① 堺市史に文書写真が見える。

② 大乘院寺社雜事記文明三 閏八 九

- | | |
|---|---|
| ③ | 文明七 八 十九 |
| ④ | 維摩會講師方条々 |
| ⑤ | 文明六 四 五 |
| ⑥ | 文明十二 九 十 |
| ⑦ | 文明十五 十二 廿一 |
| ⑧ | 文明十九 三 廿六 |
| ⑨ | 松屋名物集 |
| ⑩ | 東大寺法花堂文書永祿十三 四 廿四券、
「是本券文者今度一乱ニ堺津へ隠申候間、重而尋出渡可申候」とある。 |
| ⑪ | 興福寺良尊一筆大般若經奥書 |
| ⑫ | 多聞院日記 |
| ⑬ | 史学雜誌五九之四拙稿「豊臣秀吉の都市政策一斑」 |

四

堺は南北朝動亂を第一段階、応仁大亂を第二段階の契機として飛躍的に發展した。しかも南海交通から対琉球及び大陸貿易の衝点となつた。この飛躍的發展は、他の先進都市が歴史的制約に縛せられて發展の歩みが徐々なるに反し、港町であり、しかも國際貿易港たる性格を加えて、いわゆる都市としての發展を軌道に乗せ、都市自治の如きは我が國未曾有の段階にまで發展した。市民社会の構成も可能に

見え始め、市民生活の厚みも出て来た。文化の面においては、奈良・京都のそれを受入れる。奈良・京都の文化は質的には多少の相違はあるが同一文化と見てよく、奈良からも京都からも注入した。地理にしてもその史的關係からいうても、奈良からのそれが多かつたであろう。しかし応仁大乱以後の堺の盛期に至つては、ここ国際港で新成せられた文化の京都及び奈良に注入したものが尠からざるものと思われる。

京都文化流入の例は仏教の堺に於ける流通などもあげられようが、奈良文化流入の好箇の例は、堺市民が春日若宮祭を摸した風流を為していたことである。堺は永正五年二月には千余間の災する大火があり、また大永六年八月には二千七百間も焼失したが、奈良ではそれらは兩度とも風流をした神韻だといっている^①。これはまた堺市民生活の躍進を物語るものであろう。風流では面白いことがある。延徳三年二月に夜盜が狸々となつて豪商の家に押入り、財室を悉く奪ひ去つたという噂が京都に伝わつた。実をよく尋ねると、狸々ではなく、弁才天に変装して石橋の藤右衛門方

に押入つたということであつた^②。これは町人が福神入来と喜んで迎え入れた当時の町人思想が髣髴されている。また奈良に發達した能楽・茶道は堺に流入した。これは奈良に發生したというても過言ではない程のものであるが、奈良での發達には限度があつた。京都或は堺に出ることによつてその發展が可能となつたのである。詳述は避けるが、茶道の珠光の如き、堺にその住居を卜したことがあるとも伝えられ^③、奈良茶人で堺で名をあげたものも多いし、堺で茶道は洗練され、これが奈良へ逆輸入されるというた形にもなつている。歌道に於いても奈良から堺に向つたものもあるが、牡丹花肖柏の堺止住によつて、堺から奈良伝授の一流が送られたのも同種である。永祿二年から元龜二年に至るまで畿内の覇將松永久秀が奈良多聞山城にあつたことも、奈良・堺の文化交流を増進せしめた所以でもあろう。堺に来つた宣教師が松永久秀に宣教の許可を求めに奈良に出入したこともその大和伝道の端著となつている。それには秀の臣として高山右近が在寧し、また大和沢城にあつたことが關係している。

奈良と堺、京都も考慮に入れて、貴族文化の町人文化への取入れ、町人文化の上洛などがこれらの関係のうちに見出され、次代の町人文化発展の基礎を形づくつたものである。また芸道と称せられるもの多くは、この関係のうちで育くまれたものであつた。^⑦奈良と堺との文化関係は、その社会経済関係を基として密接に展開した。いま春日社頭に堺の魚屋彌次郎寄進の石燈籠が蔵存しているのは、その関係を語る記念碑といふべきである。堺の魚屋といへば、これはいつに遡らぬ奈良への魚貝供給者であり、その魚売など各地及び外国の風聞などを細やかに伝えてくれるニュース供給者でもあつた。

① 實隆公記求正五二六、祐維記大永六九

② 蔭涼軒日録延徳三二一、同十三

③ 松屋名物集

④ 耶蘇会士通信

⑤ この章は拙著「中世文芸の源流」に関連する。

⑥ 例えば元龜二年の一乘院坊官二条宴乘記十一月八日の条に、

「魚ウリ堺より四五日以前ニ罷上由申之間、高屋表様鉢尋云々」とあり、三好三人衆及び松永久秀が畠山昭高を河内高屋城に攻めた様子の語られたことが見える。

五

奈良と堺とは大和川に沿うて亀瀬越をし一日行程にある。中世では大和川は大坂湾に注いでいたが、奈良と堺とはそれに殆んど沿うて上下に位置していた。また奈良で海上に到達し得る最短地点が堺であつた。かかる地理的關係がある上に、奈良がその魚貝をここに得、奈良の貴族社寺がこれを荘園化したこともその関係を密ならしめるものがあつた。両者の中間には信貴山寺があり、これがその中継となつた場合もあろう。^①しかも堺は全く幸運に恵まれてその港湾が拡充され、港町が飛躍的に形成された。そして奈良とは相對關係となり、更に堺は飛躍して奈良を殆んど從屬的地位に転位せしめた。近世に於いても大坂に次第にその地位は譲るが、なお關係は絶たれない。奈良は荘園領主都市に始つて、終始生産都市への転進は見られず、消費都市たるの地位に止つたので、遂に港町にして遠国外国商品の集散地たる堺の發展につれ、これが從的地位に陥つたのであつた。これは文化面に於いても或程度までは同様といえる。

しかも両者の社会経済文化の交流は、それぞれその市民社会の成立を促進せしめる。それは一旦は封建君主の制約には遭うが、またその枠内で成長を遂げるものである。荘園領主及びその居住都市と港湾都市との関係推移の一類型として本稿を成したものである。

- ① 例えば文明十二年に一条家は作事をするのに堺集荷の材木を使用するが、堺に勢力の及んだ畠山氏が混乱するので、大乗院尋尊は畠山氏に申通じ、左右の返事を信貴山寺まで返事して欲しいというているし(雑事記文明十二、二十二、)堺から奈良に入つた松永久秀は先づ信貴山城を築き、次いで奈良を居城としてからもこれを支城として扼している。なお信貴山城が堺奈良の街道となつていたこともある。
- ② これについては別稿「都市自治の限界」が社会経済史学に発表される予定である。

京大・史学研究会編

人類文化史叢書

第一卷

人類と文化

内 容

人類と文化

人類の進化

世界の人類

アジア人種の構成と起源

文化の起源と成立

先史時代

エジプト・メリポタリア

ヨーロッパ

インド

中国

朝鮮、日本

A5版、上製二三六頁
定価 三〇〇円

徳田御稔

藤岡謙二郎

島 五 郎

樋口隆康・澄田正一・岡崎敬

角 田 文 簡

村田敏之亮

田村実造

岡田芳三郎

榎本亀次郎

小林行雄

三 到 社

京都市東山区本町
一丁目七五八番地

tinguished from that of the Manno. The seven claimed its water from the beginning but we see Yogita village control its greatest part to its own use. This is due to its financial support and the other villages seems to be given its surplus water. The other reservoirs may be helpful to these villages, but in comparison with the great quantity of water of the Kaida they are of no use to the needs in the rice-planting season. Compelled to these bad and unfortunate circumstances and yet unable to get rid of them these villages emerged as a peculiar community.

Sakai and Nara

A Study of the Relationship between the Seigneurial and the Port City

by

F. Nagashima

It was through the turbulent ages of the Nanboku-cho that Sakai-noura, once a deserted manor of the Sumiyoshi and the Kasuga Shrines in Nara, emerged as an important depôt of the knightly class. Thus the feudal relations that had been existed between the two cities, Nara and Sakai, were completely reversed with the commercial development of the latter. The second step toward its supremacy was taken during the Onin conflicts that followed the civil wars of the Nanboku-cho and its positive participation into the civil life of Kyoto and Nara enabled the citizens of Sakai to achieve a mellow and cultural life. In this article I aimed at the analysis of the inter-relations between the seigneurial control of Nara and the claims of the port-town which was to emerge as a powerful city of feudal Japan.

The Social Structure under the Gupta Dynasty (II)

by

K. Sato

The rural community of the Gupta era was composed of some ten small settlements clustered around a capital village. Its members